

時代はマイキングだ

コロナ禍になり、映像やネット空間を介したオンラインパフォーマンスを経験するうちに、音楽表現におけるマイキング（マイクロフォンの選定・配置など）の重要性を意識するようになった。

自宅のアパートでは、楽器を演奏したり大きな音を鳴らせないが、小さな物音でも上手にマイクを近づければオンラインの聴衆に音を届けられることができる。やがて、大きな音を用いる音楽表現よりも「小さな音や実験的なマイク装置を切り口とした音楽」の方がコロナ禍の音楽環境と相性が良いのではないか、と考えるようになった。

一方で、一般的なマイクは舞台や映像のなかで目立たないようにデザインされている。マイクの存在感を主張するようなデザインがあっても良いのではないかと考え、耳型マイク装置『擬似耳（ぎじじ）』を開発し、擬似耳を用いた実験的なマイキングの実践としての音楽を『耳奏耳（みみそうじ）』と名付けた。

話は変わるが、2021年のゴールデンウィークは、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言のため実家に帰らなかつた。

家族への感染リスクを考えると仕方ないが、いつまで続くかわからないコロナ禍において、何とか触れ合う機会を持ちたいと考えた。そこで自分の耳を3Dスキャンして制作した巨大な耳型マイク装置を実家に送ることにした。耳型マイク装置を息子の耳だと思って「耳かき」をしてもらい、その音を配信する。

様々なことが規制される年に、私は耳になって帰省する。